

サントリー文化財団の目的は、わが国の国際化、高度大衆社会化の時代に応えて、それを支える学術研究の育成、文化活動の振興ならびに国際交流の推進に寄与することにあります。この主旨に基づき、毎年、広く社会と文化を考える独創的な研究者および評論家に対し、「サントリー学芸賞」を贈呈いたしております。

本賞は政治・経済、芸術・文学、社会・風俗及び思想・歴史部門の4分野に分かれ、原則として各部門から合計9名が顕彰され、副賞として100万円が贈呈されます。

昭和56年度サントリー学芸賞受賞者

政治・経済部門

中嶋 嶺雄氏（東京外国語大学外国語学部教授）

『北京烈烈』（筑摩書房）

村松 岐夫氏（京都大学法学部教授）

『戦後日本の官僚制』（東洋経済新報社）

安場 保吉氏（大阪大学経済学部教授）

『経済成長論』（筑摩書房）

芸術・文学部門

中野 三敏氏（九州大学文学部助教授）

『戯作研究』（中央公論社）

芳賀 徹氏（東京大学教養学部教授）

『平賀源内』（朝日新聞社）

社会・風俗部門

岡崎 久彦氏（駐米日本国大使館公使）

『国家と情報』（文藝春秋）

金子 務氏（中央公論社「自然」編集部次長）

『アインシュタイン・ショック』（河出書房新社）

平川 祐弘氏（東京大学教養学部教授）

『小泉八雲』（新潮社）を中心として

思想・歴史部門

塩野 七生氏（評論家）

『海の都の物語』（中央公論社）

吉沢 英成氏（甲南大学経済学部教授）

『貨幣と象徴』（日本経済新聞社）

中嶋 嶺雄著

『北京烈烈』(上) 激動する中国 (下) 転換する中国

中国で「プロレタリア文化大革命」が始まった時、日本の知識人の中には、ソ連・東欧など現存社会主義国へのあき足らなさもあって、文革の中に何か新しい理想的社会主義への胎動があると錯覚し、それを無条件で礼賛していた人が少なくない。

だが中嶋嶺雄氏は早くから、「文化大革命」とは、その本質においては明らかに、深刻な政策論争を背景にもつ政治闘争以外のなにもでもあり得ないのである」と指摘していた。その分析が正しかったことは疑いをいれない。

いや文革だけではない。中国はその後も激動を続けてきたが、その都度、中嶋氏が発表してきた分析、論評は実的確であった。正直のところ評者などは、中国を知り、見つめる際に、どれほど中嶋氏の分析、解説を指針とし、それに導かれてきた何らかの社会的基盤があり、その基盤は鄧小平路線をもってしてもそう簡単には一掃されないのではないかという疑問が湧く。著者のいっそうの解明に期待したい。

(東洋経済政経部副部長 湯浅 誠)
(筑摩書房 上下各二、四〇〇円)

小尾 敏夫著

『株式会社 アメリカ』

かつてアメリカは「日本には『日本株式会社』と呼べる政府と産業界の独占的結びつきが存在する」と決めつけて攻撃してきた。しかし、日米繊維交渉をはじめ自動車輸出規制などをめぐる通産省と業界の対立関係をみればわかるように、もはや官民一体の日本株式会社論は実態にそぐわない面が多い。逆に、その「アメリカこそ官民協調の道歩んでいる」と著者は指摘する。

本書は、これまでよく知られていない複雑なアメリカの政府と産業界の協調関係の実態を豊富な資料と事例、さらに日本との比較において具体的に解明したもの。とく

かわからない。中国に関心を持つ日本人の中で評者のような人は少なくないであろう。

本書は一九六六年から八〇年にかけて、つまり文革の開幕から今日の「四つの現代化」の時代にいたる現代中国の十五年間の激動の軌跡を、「その実像を求めて逐いつづけ、分析し、あるいは問いつづけねばならなかった」中嶋氏が発表したほう大な量の論文、論評、解説の一部を網羅したものである。「一部」といっても、本書は上下あわせて九五〇ページにのぼる大著である。

著者は本書への収録に際し、表現上および内容上の補正を一切行っていないが、本書を読むと、いまさらながら著者の中国を見る目がいかに確かだったかに驚かされる。とくに文革の発動、九全大会、林彪事件、天安門事件、毛沢東の死、鄧小平の復活など重要な転換点での分析は先駆性を持っていたといえる。評者などはただただ感服するばかりである。

その確かさはどこからくるのだろうか。「激しく揺れ動く今日の中国の政治の実態にアメリカの官民協調のメカニズムを、大統領対議会の政策決定の関係」最もアメリカ的な職業—議会ロビイストの活動内容”、大使までが動員される星条旗商法の輸出促進”など政治、経済分野、さらに国内、国際活動にわたってオールラウンドに観察しているのが特徴。

日本の二十四倍の国土に八〇近くの人種が同居する複雑なアメリカを単一の倫理でとらえるのは困難であり、また自由世界一位と二位の日米経済の比較や相違を単純な二分法で強調しすぎるのも誤解を招く一因とする、著者の視点は明快である。そして、アメリカに関する情報量や日米交流バリエーションが多いだけでは、対米理解の深さを意味しないと前置きし、例えば「自由貿易」や「対ソ脅威」など両国間の認識のズレをいかに解消するかが緊急課題だと述べる。その点、政策面での現代アメリカ研究充実の重要性への呼びかけには共鳴できる。

著者は私のかつての学生の一人であり、大学時代より見守ってきたが、気鋭の研究者として日米関係の健全な発展を願う著者の並々ならぬ意欲が本書のいたるところに

とその本質は、やはり「中国を見る」ことによってではなく、中国を訪問するしないにかかわらず、「中国を考える」ことによってしか解明できないのではなからうか。つまりわれわれが膨大な情報を整理するなかで、その論理化への不断の努力を続けることによってしか、とらえられないのである」と著者はのべている。本書の編集者はそれを「方法の勝利」と評している。この姿勢は、中国にさまざまな思い入れをし、敗退していった知識人とは対照的である。

なお僭越ながら一言。著者は「中国の将来の展望は、大局的に見た場合、中国の内政・外交の基調が当分の間に再び大きく変動するとは思えない」、なぜなら「四つの現代化」は今日の中国にとって、もはや逆転し得ない社会的・国家的要請だからである」という。確かに大筋においてはそういうことは言えるのであろう。だが今日、鄧小平の近代化路線や毛沢東批判に反対する根強い反鄧小平勢力の存在をどうみたらいいのだろうか。はたしてそれは、いずれは消滅さるべき存在なのか。それらには

うかがえる。本書はアメリカブームの最中、レーガン政権の「強気のアメリカ」を理解する上で、官民協調のメカニズムを紹介したユニークな書といえよう。
評者 慶大教授 神谷 不二
(サンケイ5・8書評)
(サイマル出版会・一四〇〇円)



文化

中嶋嶺雄 著

『北京烈烈 激動する中国』(上・下)



筑摩書房刊/四六判/上・478頁
下・488頁/各2,400円

「苦悩への共感」排した 分析観点に限界が

激動15年の分析

一九六六年のはじめから一九八〇年の十二月まで、中国の「プロレタリア文化大革命」の発生から、その終息と新体制への移行まで、この大激動の十五年間、著者は、マスコミに、中国醜態にかんして多くは情勢分析にかんする文章を六百篇近く書いていた。

その中から「文化大革命」や中国内政に関するもののみ百二十余篇を著者自らえらんで、年

代順に編さんしたがこの『北京烈々』上下二巻で、合わせて一千頁近くになる。

「現代中国との格闘」

この本に採録された文章は、著者の意志によって、「すべて発表時のままとし、ごく単純な字句上の訂正を除いて、表現上

および内容上の補正を一切おこなわず、私自身が現代中国にどのようなにかかわってきたかを、私自身の責任において改めて公開しようとするものである」と著者は「まえがき」でのべている。

そして下巻の「あとがき」の中で、「文化大革命」とは「一体なんであったのか。本書はまず第一に、現代中国との私自身の格闘のありのままの証明であるのかもしれない。第二には、私自身、その渦中で泥まみれになった、わが国ジャーナリズムとの格闘の所産なのであろう。そして第三には、中国を研究する私自身の自己との格闘の軌跡であるような気がする」とのべている。

分析誤る「心情主義」

「泥まみれ」といえば、「文革」では、日中国国の多くの文化人が泥まみれになった。

郭沫若は、「文革」のはじま

●西遊記的世界

中嶋雄著『北京烈』

●三浦朱門

(作 者)

い。それで三蔵に取りなすこともしない。悟空の去った三蔵一行はたちまちピンチに襲われ、辛うじて難をのがれた悟浄や龍馬が悟空に急を知らせ……。

三蔵を日本の大衆、猪八戒を俗に言う日中屋、悟空を中嶋雄氏ら少数の学者、ジャーナリストと考えれば、西遊記の一節はそのまゝ、日本の中国に関する言論に当てはまるのである。北京政府を妖怪にたとえるのは失礼だが、しかし、「賢明なる」日本人大衆を、どうしようもなく愚かな三蔵にたとえるのだから、その点、五分五分ということで許していただく。とにかく、北京政府は美女に化け、御馳走をちらつかせて、猪八戒を誘惑するのであった。元々、誘惑に弱い八戒どもはたちまちトリックにひっかかった。

「ね、お師匠さん、こんな人里離れた所で、仏法を信じている人がいるんですぜ。しかも大変な美人で、おまけに御馳走のおいしそうなこと。この際、彼女の好意に甘えさせてもらいましょうよ」

とかき口説く。もっとも日中屋たちは、こんな下手に出た言い方はしない。新中国にはハエはいない、という宣伝からはじまって、一反で何百石とかの米をとる農法が開発されたの、八億の民が一丸となって、私心をすてて偉大な中国建設にいそんでいる、といったことをのべた後で、日本人民もぐずぐずしている、中国人民に対して恥ずかしいばかりでなく、アジアの狐兎になるぞ、とおどし

りでなく、アジアの狐兎になるぞ、とおどしをかけたのであった。アメリカと手を切つて、中国と共に新しいアジアを作ろう、というあたり、戦時中の右翼と同じメロディの歌を歌う人もいたが、考えてみればそれも当然である。戦時中、日本人将校による中国兵百人斬りの武勇伝を書いた新聞記者が、戦後は日中屋の一人になっているのだから。村田英雄とか三波春夫のような、浪曲出身の歌手は、歌謡曲を歌っても、どこか浪曲風になるのと似たようなことだろう。

とにかく、この時期、主なマスコミの中国関係は日中屋に占拠され、ある大新聞はかこみの署名記事ですら、北京に批判的な言論の掲載を拒否した。だから孫悟空の言葉はなかなか三蔵の耳に入らなかつたのである。何か言おうとすると、八戒が大声で、

「しかし、アニキもやりすぎだよ。お師匠さんは殺生が嫌いな、知ってるだろう。それをいきなり、なぐり殺すんだから」とわめきちらしたのである。

二

西遊記の悟空は破門になると、ひねくられて水簾洞に帰ってしまうのだが、日本の悟空たちは総合雑誌やミニコミを中心に、細々と書き続けてきた。その一つの集大成が、中嶋氏の「北京烈」である。これは一九六六年か



中国を見る目の確かさ

『北京烈烈』(上下)

— 激動する中国、転換する中国



中嶋 嶺雄 著

中国社会に大きな傷跡を残した文革について、今年六月に開かれた中国共産党第一期六中全会の決議は、「文革はいかなる意味においても革命とか社会的進歩ではない。文革は指導者がまちがって引き起こしたもので、党と国と人民に大きな災難をもたらした内乱である」と断じていたが、この本の著者・中嶋嶺雄氏こそ、文革の本質がそのようなものであることを、文革開始当初から指摘していた数少ない日本人中国研究者の一人である。

著者は文革が始まった一九六六年から八〇年までの一五年間に、中国問題についての論評・解説を約五六〇編(書評、講演録、TV・ラジオの記録、学術論文を除く)発表し、訳・編・著書を二〇冊あまり出してゐる。つまりそれだけの膨大な作業を通じて、日本人に文革の実相を伝え続けてきたわけであり、日本人の中国認識を深める

面で、著者の功績は少なくなかったといえる。

この本はその五六〇編の著述のうち、日中関係、中ソ関係、米中関係など国際問題に関するものを除き、主として中国内政や文革に関するものを約一二〇編収録してあり、いわば著者の文革論の集大成である。

本書に収録するにあたって、著作はすべて発表時のままにしてある。いまこの大著を読み返してみると、いくつかの点で著者の分析・見通しに誤りがあったわけではないが、それらはささいなことであり、著者の功績をいささかも傷つけるものではない。

文革の本質は何か、林彪はなぜ失脚したか、批林批孔運動とは何か、天安門事件はなぜ起きたのか、「四人組」の失脚の原因は何か、華国鋒と鄧小平の対立はどうなるのか、などについて著者は実的確な分析・見通しをしてゐた(米中接近についても早くから予想していた)。

新刊

『手づくり』

自然エネルギー
市民エネルギー研究所編

石油危機以後、太陽熱、風力、地熱、バイオマスなど自然(ソフト)エネルギーに対する関心が急速に高まった。ソフトエネルギーの利用と言つても、香川県尾町で行なわれている太陽熱発電のような大がかりなものから、個々の家庭に備え付ける太陽熱温水器まで様ざまである。

『商品生成表論』

島野 隆夫 著

資源、エネルギーを初めとする各商品が、中間品を経て家計、政府、輸出、投資、在庫の五つの最終需要部門にわたる生産プロセスにおける物量的な配分を、すべて計算した一覽表である。このため昭和五〇三年の産業連関表の政府公表データ三万個をIBMのコンピュータに投入したという。資源とエネルギーは有限であり、この物配分は今後、急ピッチに変貌していく。どんな国家体制であつても、生産予測や計画には、こうした作業が欠かせない。著者は大阪でシマノ工業を経営する超多忙な経済人であるが、そのかたわら日本経済の基本的なデータ分析に打ち込んでゐる街の篤学者である。

『死して朽ちず』

— 自山人の随想

竹井 博友 著

経営者(地産グループの総帥)であり、ジャーナリスト(前・中部読売新聞社長)でもある竹井氏が、第一線を退いたのを機会に人生、世相、生活の知恵などを自ら

現代中国学建設の苦闘

「北京烈烈」(上下)

中嶋 嶺 雄著

筑摩書房・各辛二、四〇〇

著者は現代中国について正しい分析を行ってきたという、世評が高いものの、その論述が十五年間にわたっており、しかも多種多様の新聞雑誌に発表してきたため、具体的にその内容を収集し読むことが困難であつ

書評

た。そのため、評者は間接的にしか著者の意見がわからなかつた。

ところが本書は、著者の「文革中国に関する著述一覽」を付録としているので、処女作『現代中国論』以来の著者の軌跡が一目でわかるようになった。著者の論考に対する批判(肯定的にせよ否定的にせよ)は、この

付録が基になるであろうことが予想され、良心的な公開であると考ええる。

その軌跡の骨格となつている著述を選択して一九六六年(文革表面化)から八〇年まで編年的に収録したのが本書である。

だから、細部は別として、著者の立場や中国分析の重要なところは、本書によって十分わかる。

世評や本書についてのいくつかの書評によれば、著者は現代中国を権力闘争という視点に基づいて分析し、結果を正しく予

測してきたこと、またその間、中国大陸礼賛の日本のジャーナリズムと格闘してきたことが高く評価されている。そのことについて、評者も読後に同感であり、それ以上付け加えるべきこととはない。

そうした優秀さはジャーナリズムにとつて大いに関心が持たれるところであろうが、評者は研究者として本書にまた別の関心を抱いた。それは現代中国学建設への苦闘である。

古典中国学は長い伝統と研究の厚みとによって、学としての地位を確立している。これに反して、現代中国学は若く荒削りな分野であり、学としてのよりに位置づけらるのかまだ大海

を漂っている。そのような状況の中で、著者が現代中国学建設を意図したのが本書であると理解した。

その大きな理由は、豊富な資料収集と「私はホテルをそつとめけだし、ヨレヨレになつた外套を着て紅衛兵の群れの中をさまよつた」という実証主義精神にある。そして、状況に流されず、冷静な科学者の眼で整理して、いわゆる思い入れがない。現代中国学の多くが学者としてだめなのは、資料が偏つていて、その上思い入れで論じ、しかも状況に流されているからである。つまり、学の特徴であるところの「対象の客観化」ができないのである。それがこれ

まで現代中国学を育てえなかつた根本原因である。本書がその欠点を克服しようとしている努力をこそ高く評価したい。著者は学術論文を収めていないと述べるが、それは謙遜であろう。学術論文であれ啓蒙著述であれ、根底の態度は同一である。希望を述べらば、当時、

台湾の資料も見ていただきたかった。著者と立場が異なりこそすれ、台湾も大陸を権力闘争の観点から独自に分析していた。今後、著者の著述に台湾の資料が加わるならば、より客観的な現代中国学建設へとつながってゆくであろう。

加地伸行(名大助教)

『北京烈々』

上―激動する中国―
下―転換する中国―

中嶋嶺雄著

筑摩書房刊

上・下各二四〇〇円

書評

この本は中国で文化大革命のはじまった一九六六年から昨年の九月までの間に、中嶋嶺雄氏が雑誌その他に発表された文章をまとめたものである。

毛沢東に「本物の金であるかどうかは、火の中へ投じてみればわかる」という意味の言葉があるらしくて、文革中に中国へ行った時

に、紅衛兵や造反団がしばしば口にしたものであった。実権派が真の共産主義者であるかどうかということは、文革という火の中でわかるのだ、と言うのである。

日本の中国研究者にとって、文革はその中国認識が本物であるかどうかを試す火であった。中国研究者や新聞の殆どが、文革の炎が消えた燃えかすの中に、実はガラクタにすぎなかったという正体をさらけ出してしまった。こういう人々はいまも親中屋として活躍しているが、文革中に発表した文章を世に問う勇氣が持てるか。中嶋氏は文革を通して本物であることを証明した、数少ない中国研究者の一人である。

現代は情報化社会であるとい

う。が、情報は、それを正確に分析する頭脳を持たなければ、かえって誤りを犯すものになる場合がある。文革がそうであった。表面の荒れ狂う波濤の底に、大きなうねりが流れていた。その底まで見透さないと、表面に起る波の意味も理解できなかった。中嶋氏は、表面の波を的確に分析することによって、底のうねりを捕らえている。

現代は情報化社会であるとい

ていない。そのかくされた真の意

味を、中嶋氏は事件を分析することによって説明する。その説明が的確であったことは、次に起る事件によって証明される。そしてこれらの事件のかくされた真相を、その事件を分析して説明する。それが事実であることが、そのまま次の事件によって証明される。ここには一種の謎解きの興味があって、名探偵が連続事件を次々と解いて行くような、推理小説的な面白ささえあって、上下二冊の大部の本を、そういう興味につられて、私は読み通してしまった。

現代中国を本当に考える場合、文革を抜きにすることはできない。その意味で、中国に関心のあ

投

書

平和を恋う勿れ

「安易な軍拡論に反対する」と題して朝日新聞(10月20日付)に

宇都宮徳馬氏の論文が掲載され

た。安易な軍拡に反対することは

結構だが、安易な平和論も私は排

したい。平和という結論を出すた

めの論理の遊び、信念と政策を混

同した方法論、さらには世界の現

『北京烈々』

上―激動する中国―
下―転換する中国―

中嶋嶺雄著

筑摩書房刊

上・下各二四〇〇円

書評

この本は中国で文化大革命のはじまった一九六六年から昨年の九月までの間に、中嶋嶺雄氏が雑誌その他に発表された文章をまとめたものである。

毛沢東に「本物の金であるかどうかは、火の中へ投じてみればわかる」という意味の言葉があるらしくて、文革中に中国へ行った時

に、紅衛兵や造反団がしばしば口にしたものであった。実権派が真の共産主義者であるかどうかということは、文革という火の中でわかるのだ、と言うのである。

日本の中国研究者にとって、文革はその中国認識が本物であるかどうかを試す火であった。中国研究者や新聞の殆どが、文革の炎が消えた燃えかすの中に、実はガラクタにすぎなかったという正体をさらけ出してしまった。こういう人々はいまも親中屋として活躍しているが、文革中に発表した文章を世に問う勇氣が持てるか。中嶋氏は文革を通して本物であることを証明した、数少ない中国研究者の一人である。

現代は情報化社会であるとい

う。が、情報は、それを正確に分析する頭脳を持たなければ、かえって誤りを犯すものになる場合がある。文革がそうであった。表面の荒れ狂う波濤の底に、大きなうねりが流れていた。その底まで見透さないと、表面に起る波の意味も理解できなかった。中嶋氏は、表面の波を的確に分析することによって、底のうねりを捕らえている。

現代は情報化社会であるとい

ていない。そのかくされた真の意

味を、中嶋氏は事件を分析することによって説明する。その説明が的確であったことは、次に起る事件によって証明される。そしてこれらの事件のかくされた真相を、その事件を分析して説明する。それが事実であることが、そのまま次の事件によって証明される。ここには一種の謎解きの興味があって、名探偵が連続事件を次々と解いて行くような、推理小説的な面白ささえあって、上下二冊の大部の本を、そういう興味につられて、私は読み通してしまった。

現代中国を本当に考える場合、文革を抜きにすることはできない。その意味で、中国に関心のあ

投

書

平和を恋う勿れ

（松村 暎 慶応義塾大学教授）

「安易な軍拡論に反対する」と題して朝日新聞（10月20日付）に

宇都宮徳馬氏の論文が掲載された。安易な軍拡に反対することは結構だが、安易な平和論も私は排

したい。平和という結論を出すための論理の遊び、信念と政策を混同した方法論、さらには世界の現



今日を見通したりアルな認識

中嶋嶺雄 「北京烈烈」上・下

本書は、わが国の中国問題の第一人者中嶋嶺雄氏が一九六六年から八〇年までに執筆した膨大な評論、解説、エッセー類を集大成したもので、中国に関するすぐれた同時代史的品格を持っている。

周知のように、この間の中国は、文革、毛・林体制形成、林彪事件、「四人組」時代、周恩来、毛沢東の死去、「四人組」追放、鄧小平時代の到来そして文革否定、近代化路線の推進とドラスチックな展開を極めたが、本書はそうした激動のなかで著者がリアルな中国認識と真摯な研究態度を貫き、中国情勢をフォローしていった「格闘の軌跡」(著者)であり、流麗かつ

緊迫した筆致から激動の中国の状況が昨日の出来事のように鮮明に浮かび上がってくる。

今日、中国が大きく方向転換するなかで、中国の内実があらさまになるに伴い、かつてあれほどわが国の論壇やジャーナリズムを席捲した中国ブームはすっかり冷めてしまった。今こそ革命後の中国の実像を冷静に検証し得る時期を迎えたわけだ。スマートに編集され、タイミングよく出版された本書は、わが国が中国をリアルに再検証していくきっかけとなるかもしれない。

それにしても、文革期から転換期を通じて多くの論客が中国を論じてきたが、自分の書いた

は、最近書かれた力作論文「中国よ今こそ文化大革命を」(本書収録)や「文明の『再鑄造』をめざす中国」(中央公論七九年十一月号)にみられるように、よりスケールの大きい文明論、文化論の方向を目指すような気がする。

(筑摩書房 各二四〇〇円)

「信頼される放送」浮き彫りに

ロバート・メッツ 岡村黎明訳

「CBS—アメリカTV界の内幕」

アメリカが世界最大の放送王国であり、その主体が商業放送であることは、わが国でも広く知られているところだ。

CBSは、そのアメリカ放送界の代表的な存在であり、その誕生から成功までの苦難の足跡をたどることによって、この本は自らアメリカ放送界の内幕や、アメリカ社会がもつさまざまな競争の世界を物語ると同時に、アメリカ民主主義のために闘う、放送ジャーナリズムの側面史ともなっている。



本書はまた、ニューヨーク・タイムズの記者である著者が、CBSを中心としたアメリカの報道関係者百二十人にインタビューして、経営、放送番組誕生の過程、それらを取りまくさまざまな人物像を浮き彫りにしており、わが国の放送界との比較

文章をそのままの形で今日発表できる者がどれだけいるであろうか。その点、著者は心情的、観念的な文革礼賛論がはびこるなかで、あくまでリアルな中国認識の立場から、文革については「毛沢東政治の極限的形態としての党内闘争の大衆運動化」としてとらえ、中国の権力構造についても常に「安定」を疑問視する態度をとってきた。こうした著者の視点は、「少数派」に属し、批判を浴びたけれども、毛沢東死後の中国政治の大転換と文革全面否定は、著者の中国認識こそが正しかったことを雄弁に物語っている。



七六年八月に書かれた評論の中に次のような一節がある。

「現代革命の世界ないしは社会主義の世界には、たんに偶然と

からも興味深い。

記者がそのまえがきでも取りまわっているように、CBSの特色と成功の原因は、第一にニュースを重視したこと、第二に番組の編成に大きな権限を与えたこと、第三にネットワークによる各地域への影響力を重要視したこと——の三点であった。

そのなかでも、第一のニュースの重視が大きい。「大事なことには、アメリカはCBSニュースを頼りにします(When it counts, America counts on CBS news)」とは、同社の自己宣伝であるが、決して大げさではなく、「大統領よりも信頼されている」とさえいわれている。ここにCBSへの注目の価値があり、わが国の場合と比較する興味もある。

本書は、このニュース重視の経緯をめぐって、日本のジャーナリズムにもよく知られているキャスターのアンカーマン、クロンカイト、さらにはシルバーマン、フレンドリー、マロー、

のみ言い切れないある種の歴史的同義性が約四半世紀というサイクルで存在しているように思われてならない。……本年(七六年)はまさにスターリン批判以後二十年に当たるので、あと五年前後を経た八一年前後に「毛沢東批判」が敢行されて、中国は八〇年代に本格的な工業化への移行を開始し、様々な激動と曲折のち、徐々に「開かれた中国」に移行してゆくことになるのかもしれない」

ユニークな巨視的視点から、すでに五年前の時点で毛沢東批判と近代化をズバリ予測していた著者は、多くの不確実性に満ちた中国の将来について、「中国は結局、約四半世紀の時差を置いてソ連のたどった道をほぼたどるのではなからうか」と指摘する。

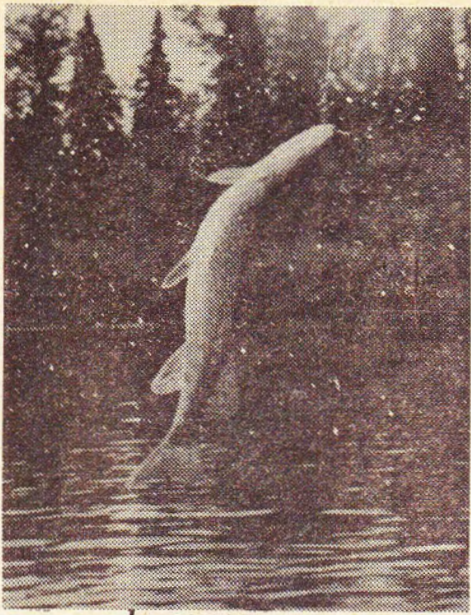
ところで、中国の将来とともに、中嶋氏の「将来」も気になるところであろう。「現代中国論」で毛沢東思想を鋭く解明し、「中ソ対立と現代」で五〇

ペイリー、スタントンといった、経営や番組編成に特色をみせた人物を多く登場させている。が、なんとといってもCBSのニュース報道にみる勇敢さ、生々しさ、経営陣に立ち向かうジャーナリスト魂のたくましさ、また、ベトナム戦争時にみせた批判的報道のくだりなどは、アメリカ民主主義をまのあたりに見せつけられて、圧巻だ。

経営面にみるCBSの特色のひとつとして、常識はずれともみえるほどの若い人材の登用がある。これは、アメリカ社会における経営操縦の内幕として、放送から離れても興味をそそられるところ。

わが国では、東京放送がこのCBSを徹底的に分析、研究して、経営面に多くの類似点を見せているが、同社に対する評価の高まりにもうなずけるところがある。しかし、「ニュースの重視」という点では、ワイドニュースが芸能人との対面にう

1981.10.31



河に、湖に、海に、ひたすら獲物——未知の魚を求めて広大な南北アメリカ大陸五万二千キロを縦断した、雄大で凄絶で鮮烈な「渉獵」の記録である。

文明を拒否する大自然の奥深く、出つくわす珍魚、奇魚、怪魚との格闘、死闘、それは想像を絶して圧倒する空間であり、開高健ならではのフィッシュ・オンの世界に引きずり込まれる。

旅の行く手に出現する人間群像、鳥獣虫魚、自然の表情なども鮮やかである。

（朝日新聞社・各三、五〇〇円）

もっと遠く！ (北米篇) もっと広く！ (南米篇) 開高健著 水村孝・写真

多いかもしれない。かと思えば、麻雀好きで、勉強中の子供たちを無理やり引っぱり出し、一番小さい子から巻き上げ、細君にたしなめられる父親、宿酔の時、日頃、説教をする手前、新聞で顔を隠し、赤いワシのような目玉を子供たちに見られたくなかった父親、夕立が来て傘を持って暗闇の中を

「向田敏雄」と父親の名を呟きながら迎えにいくと「歩きながら親父の名を宣伝して歩く奴があるか」と怒るが、あとで気転が利くと母親にほめられ父親等々。細かく観察しながら父親への情愛を感じさせるような人情の機微のとらえ方は、深みはなくてもうまさの点で抜群であった。

一方では、痴漢から逃げ出し、一週間もかけて見つけて警察へ突き出した執念と気の強さ、原稿の書けない言い訳に「パンタロンのゴムがきつかったから」など、理不尽の理由を述べる自分の強情さにも十分気がついている。

そして「ヒコキ」という項に「一週間に一度は飛行機のお世話を許していないが、まだ部屋や抽斗の中を片づけてから乗ろうと思うのだが、あまり綺麗にすると万一のことがあったとき、やっぱりムシが知らせたらだね」など言われそうなので、ここは縁起をかついでそのままにしておくと、わざと汚いままに旅行に出たりしている

「この最後の旅行に出たのも痛ましい。」

北京烈烈 激動する中国

中嶋 嶺雄著 (筑摩書房・上下各二、四〇〇円)

作家を失ったことが、いかに大きな損失であるか、この本一冊からも推察できる。

（映）

文化大革命から今日の中国まで、この十五年余の中国の歴史を一言で片付ければ、こうなるだろうか。

毛沢東個人への権力の集中、それに伴う毛沢東の神格化、そしてその崩壊……この間の中国報道ほどぎくしゃくしたものはなかった。場面が変わるたびに評価が逆転したのである。

こうした混乱の中で、常に的確な論評を発表してきた数少ない学者の一人が著者である。本書は著者がこの十五年間、その

10月3日放送スタート

ラジオたんぱ 毎週土曜日(深夜) 1:30~2:00

医師国家試験 受験講座

医師国家試験受験講座編集委員会 編集

医師国家試験問題注解

ラジオ講座用 テキスト

6冊刊(隔月) 100円
年5刊 約1200円
年各刊(前) 230円
年各刊(後) 230円
年各刊(読) 230円
年各刊(購) 7200円

定期購読受付

テキスト① 好 評
10月11日分 ▶ 発売中

金原出版 電話(03)811-7161 電話(03)2-151494

「これは珍しい本である。
「毛沢東」の小論にはじまり、色彩と刺激にあふれた「中国よ、いまこそ文化大革命」の論文まで、百を超える文章を集録している。一九六六年一月から一九八〇年秋までに執筆した評論とエッセーであり、極度に流動的な状況にあった中国の毎日をフォローした文章を集めたものである。
私が珍しい本だと言ったのは、この激動の時期に、その評価や展望を活字にした人びとのなかで、自分の書いた文章をこの本のような形ですべてをもとのままに再録できる人はそれほどいないと思うからである。」

時流におもねぬ中国論集

北京烈烈(上)(下)

中嶋 嶺雄著



「田園調布教会—1976年—同書から」

しくない。だが、そればかりではなかったであろう。緒方彰氏は、「過去の中国に関する報道は大筋において見事に儀典的であった。あるいは営業的でしたらあった」と自省している。
こうした「儀典的」「営業的」な人びとに、中嶋氏がここに載せている初期の論文は批判されもした。だが、なにがはた



中嶋 嶺雄氏

して革新なのか、なにが永続的な影響力を持っているのかを見極めることができたのは、中嶋氏の方であったことは言うまでもない。

百目鬼恭三郎氏が中国を論じた人びとの文章をとりあげ、「日本では、自分の言説に責任をもたなくていいという寛容の美風があるようだ。それというのも、ものをいうたびにすぐ外れるので、いちいち責任をとっていられないせいであろう」と述べたことがある。

革命や戦争、激烈な興奮や衝突が起きれば、人びとがその興奮にひきずり込まれることは珍

私たちは、たとえば日本外交史の著者である清沢洌が、昭和十年代の日記を次代の人びとに残してくれたことを感謝している。「現代中国論」「中ソ対立と現代」の研究を発表した中嶋氏が、中国の毎日を追い、筆をとった記録は、まさに日記であり、それがこのようにすっきりした形でまとめられたことは、後代のために有用であると考え

(筑摩書房・各一四〇〇円)
評論家 鳥居 民

読書



武林 敬・画

乗り物の運転は苦手である。しかし時刻表片手にミッドナイト・ゴーストにのび寄りたり、徐行中に飛びおろしたりしての旅も、それに劣らずスリルにみちたものだ。

畑山博は、これまで一貫して社会の周辺部に住む人たちを描いてきた。彼の読者が必ずしも多くなかったのは、彼らが素朴で、単純すぎるところがあり、若い読者にとって感情移入させることが困難だったためだろう。その点でも、この『二人だけの島』は今までも多くの読者の共感を得るにちがいない。

(講談社・二二〇〇円)
文芸評論家 利沢 行夫

これは過去十五年にわたって、中嶋氏が書き続けたものの集大成である。といっているさかとも古さを感じさせず、これからも中国でおこるであろう、さまざまな事件を理解する鍵になる書物である。

従って多くの日本の読者は十五年前に書かれた文章でも、昨日書かれたかのように読むことができ

る。日本のマスコミが文革報道とパ نداに迷わされている間、中嶋氏のよつなまともな言説はなかなか読者の目に届かなかつた。巨大なマスメディアは、いわゆる「日中屋」に占領されていたのであつた。今となつては、日中屋的中国観が見当違いであつたことは論証するまでもないことだが、ああい

う大きな誤りをおかしたには理由がある。

学者たちは日本の中国に対する犯罪を知る故に学者としてはありうべからざることに、資料を客観

て、足と目で現象を掘りおこすべきなのに、学者風に新中国を「分析」し、その結果得た「原則」に

あわなない原現象のすべてを、無意味なものとして、棄ててしまった

澄んだ鋭い目いきいき

中嶋 嶺雄著

北京烈烈——転換する中国上、下

的に見ることをやめてしまった。

のである。

共産中国でのおこるすべてに日本人の罪と、それを振りきってゆく

頭脳と俊敏なジャーナリストの目をあわせ持つ稀な人である。何年前であつたか、氏がモンゴルから

誰一人として、全人代の開かれて

いることに気付かなかつた。一枚のピラを発見することは偶然であ

るが、問題は偶然を生かす目である。

中国に入った時、北京の裏町にあつた一枚のピラから、北京で全国人民代表会議が開かれていること

学者としての中嶋氏を私が知るようになったのは比較のおそく、氏が一九七〇年に外務省から派遣教授として香港に行かれた当時の文章あたりからであつた。ガセネタや、デマの横行する香港情報の間から、正しいデータのみを拾い出したのは氏の学者としての底力を示したと言えよう。

過去二十年の中国報道の混迷を

思う時、鈍い頭の学者と、曇った目のジャーナリストとが倫理と彼らが思いこんでいるセンチメンタリズムによって書く記事が、一国のマスコミを支配することの弊害を、今さらのように痛感せざるをえないのである。

(筑摩書房・上下各二四〇〇円)
作家 三浦 朱門

読書

十年に及んだ「文化大革命」も、「大きな災難をもたらした内乱」ということで、中国では一応の決着がつけられたようである。

その長い騒乱の間に日本人の中国観は大きく引き裂かれた。アジアの戦後史の中で、思想的にこれほど日本人に影響を与えたものは、あまりないといっても過言ではあるまい。思つてわれわれにとって、中国の問題は何らかの感懐なしにはみられないからであろうか。

そうした日本人の感情的な中国観の間において、文革のはじめから、冷めた目で中国の動きを追ってきた二人の研究者の本は、教えるところが多く、今後の中国を考ふるうえで極めて貴重である。両者に共通しているのは、当局の発表をうのみしないので、それを全般的な中国情勢と照らし合わせるという態度である。ごく当たり前に常識的なことだが、それが中国の場合には守れなかった。

その点で中嶋氏は徹底している。史上初の「人間文革の実験」とみる文革礼賛論が日本のジャーナリズムをおおっていた当時から、これを中国共産党の党内闘争とみ

る立場に立って、つねに的確な分析を行ってきた。氏の強みは新中国成立以後の社会主義建設に対する深い研究と洞察にあった。生産関係の文革を優先しようとする家父長的な毛沢東政治と、生産力の

上・下

冷めた目で文革を分析

北京 烈 著

中嶋 嶺雄 著

現代中国の探究

野上 正 著

おくれた中国社会の矛盾をついた氏の分析と予測にそって、中国の事態は動いたといつてよからう。その先見性は文革開始以後の十五年間を通じて変わらなかった。文革は中嶋氏自身にとつても大

10年か
に収め
1600点

きな意味をもった。巻末の膨大な著者目録が証明するように、氏はこの間に中国研究の第一人者の地位を確立した。それらの評論から内政に関するものを、発表当時のままに年代順に配列したのが「北京 烈」である。事変の度にその背景を説明し、中国の民衆は毛沢東を歴史の中に相対化するだろうと説いた。文革期を通観する「記念碑」的な意味をもつといえよう。

野上氏の本はその人柄のままに気取らない文章である。文革の初発時に北京特派員だった氏は、自らの体験にもとづいて、片寄らない立場からの中国報道の必要性を強調している。文革の経過も要領よく総括されているが、むしろその特色は中国経済とくに農業の実情を、度重なる中国訪問と最近の人民日報の記事から、じつくり問い直つていこうにある。際立った礼賛でもなく、一転しての軽視でもない冷静な観察と思考の裏には、中国に対する真の愛着が感じられる。

（『北京 烈』＝筑摩書房・各二、四〇〇円、『現代中国の探究』＝日本評論社・一、五〇〇円）

本書は「文化大革命を同時代史的に追跡してきた」著者の評論集である。「毛沢東体制の動揺―彭真失脚をめぐる」(一九六六年六月)に始まり「中国よ、今こそ文化大革命を」(一九八〇年九月)に至る、長短百二十四編の文章から成る。著者が「現代中国論」をひきさげて論壇に登場したのは一九六四年、二十八歳のときであつたが、本書「北京烈烈」は「現代中国論」によつて獲得された視座・方法に基づいて、三十歳から四十五歳まで、働き盛りを全力投球した記録である。巻末の「文革中国に関する著述一覧」によ

だが、本書はこれらのうち編数で数えて約二割を盛り込んだことになる。文革の終えん以後、かつて隆盛(猖獗)しようけつ?)

なかには本書が鶴立する。文革を「一貫して批判してきた」著者の「方法の勝利」を物語るモニュメントとして。評者は今日

をもつて)たどれる本は、日本語のものとしては本書が唯一だという点でも推奨に値しよう。つまり評者は重度の痴呆(ちほう)症

であるかもしれない。あえて一例をあげれば、かつて『展望』誌でくりひろげられた中国論の総括が必要なのではないか。

文革の分析・軌跡

北京烈烈

上下

中嶋嶺雄著



状を呈すわが現代中国学界に対して、本書の刊行が強烈な刺激を与えることを期待しているわけである。人間は失敗からこそより多く学ぶ、という命題が真実であるならば、いま求められて

ありつべき「北京惨惨」と対比してこそ「北京烈烈」の光と影が浮かびあがってこよう。

(矢吹晋・横浜市立大助教 授)

著者が「現代中国論」をひきさげて論壇に登場したのは一九六四年、二十八歳のときであつたが、本書「北京烈烈」は「現代中国論」によつて獲得された視座・方法に基づいて、三十歳から四十五歳まで、働き盛りを全力投球した記録である。巻末の「文革中国に関する著述一覧」によ

だが、本書はこれらのうち編数で数えて約二割を盛り込んだことになる。文革の終えん以後、かつて隆盛(猖獗)しようけつ?)

なかには本書が鶴立する。文革を「一貫して批判してきた」著者の「方法の勝利」を物語るモニュメントとして。評者は今日

をもつて)たどれる本は、日本語のものとしては本書が唯一だという点でも推奨に値しよう。つまり評者は重度の痴呆(ちほう)症

であるかもしれない。あえて一例をあげれば、かつて『展望』誌でくりひろげられた中国論の総括が必要なのではないか。

(筑摩書房・各二、四〇〇円)

本書は「文化大革命を同時代史」巻に収録しているが「表現上および内容的に追跡してきた」著者の評論集である。「毛沢東体制の動揺―彭真失脚をめぐる―」（一九六六年八月）に始まり「中国よ、今こそ文化大革命を」（一九八〇年九月）に至る、長短百二十四編の文

論』によって獲得された視座・方力的であった。むろん大まかな計法に基づいて、三十歳から四十五歳まで、働き盛りを全力投球した記録である。巻末の「文革中国に

にとって代わられたかにみえる。寂として声なし。かくして鶏群なきなかに本書が鶴立する。文革を「一貫して批判してきた」著者の

人であり、この意味で著者の分析ぶ、という命題が真実であるならば、いま求められているのは「北京を（しかも一定の臨場感をもつて）たどれる本は、日本語のものとしては本書が唯一だ」という点でも推奨に値しよう。つまり評者は重度の痴呆（ちほう）症状を呈すわが現代中国学界に対して、本書の刊行が強烈な刺激を与えることを期待しているわけである。

中嶋 嶺雄著

北京 烈 烈上・下

文革の軌跡たどる

著者が「現代中国論」をひききかて論壇に登場したのは一九六四年、二十八歳のときであったが、

関する著述一覽」によれば、著者はこの十五年間に六百九編の著述を

文革の終えん以後、かつて隆盛「方法の勝利」を物語るモニニメ（獨断）しようけつ？）をきわめ

評者は今日の毛沢東批判を予測

横濱市立大助教授

（筑摩書房・各二四〇〇円）

東の死から華国鋒の降格までを下

本書「北京烈烈」は「現代中国編、月平均三・三編。まことに精

は歴史物とシルクロードのロマン

できなかつた（見誤った）者の一

人間は失敗からこそより多く学

これは毛沢東体制の動揺を示している」とみだ。

以後、中国は文革の熱狂に巻き込まれ、その間に劉少奇の失脚、林彪のナゾの死、周恩來の逝去、華国鋒政権の誕生、天安門事件、鄧小平の再復活、江青による華国鋒追いつきと、まさに激動に次ぐ激動だった。

しかし、こうした激変も「毛沢東神格化による権力の家父長化で、政策上の論争は隠然たる権力闘争に転化する」とみていた著者にとっては、きわめて必然的な歩みだったかもしれない。

もう一つ重要な点は「毛沢東体制下の非、あるいは反毛勢力」の存在と、その背景となる



力を、著者がしつかりと把握していた点も挙げねばなるまい。

たとえはこういいう一節はどうか。毛死去、華国鋒政権誕生の際の一文である。

「あと五年前後を経た八一年前後に毛沢東批判が敢行されて中国は本格的な工業化への移行を開始し、徐々に『開かれた中国』へ移行していくことになるかもしれない」（一九七六年）

今週のベストセラー

- ①窓ぎわのトットちゃん 黒柳徹子（講談社・一、〇〇〇円）
- ②人間万事塞翁が丙午 青島幸男（新潮社・八八〇円）
- ③吉里吉里人 井上ひさし（新潮社・一、九〇〇円）
- ④霊長類ヒト科動物図鑑 向田邦子（文芸春秋・一、〇〇〇円）
- ⑤小さな貴婦人 吉行理恵（新潮社・八八〇円）

潮社・八八〇円）

⑥思い出ランプ 向田邦子（新潮社・九八〇円）

⑦死霊 埴谷雄高（講談社・一、〇〇〇円）

⑧マリコ 柳田邦男（新潮社・一、〇〇〇円）

⑨姥ざかり 田辺聖子（新潮社・八五〇円）

⑩傷つくことだけ上手になってつかこうへい（角川書店・七八〇円）

（京都・巖々堂調べ）

鮮やかな見通しではないか。そして現在、鄧小平の中国は毛沢東神話の否定、四つの現代化に向かって走り始めた。経済進出の思惑もあって、わが国の中国への思い入れは深い。その中国の現状を、著者はこう分析している。

「テクノクラート、ビュロクラフト、インテリゲンチアが層として存在していない。相次ぐ政変で中堅幹部は日和見主義

になつてゐる。大衆も将来に不安を抱いている」

それゆえに著者は、最後にはこう提言せざるを得ないのである。

「毛沢東中国ではなくなつた。革命中国も、社会主義中国さえも内部から急速に崩壊しかねない瀬戸際に立っている。いまこそ真の文化大革命が必要なのではないか」

だが、パイロットたちは、機を駆つて空にかけのぼり、死の瀬戸際に挑み、機が制御できなくなるぎりぎりのところで、魂と反射神経と経験と冷静さを総動員して機を立て直し帰還し続ける。それを可能にするのがザ・ライト・スタッフ（正しい資質）なのだ。事故は不適切な資質の結果だというのが、テストパイロットと戦闘機パイロットの信念なのである。

*米宇宙飛行士たちの栄光と悲惨の物語

ザ・ライト・スタッフ

トム・ウルフ著
中野圭二／加藤弘和・共訳

（中央公論社・一、六五〇円）

米宇宙飛行士たちの栄光と悲惨と名声と汚辱の物語である。

それを、ニュージャーナリズムの旗手トム・ウルフは、六年間にわたる徹底取材をもとに「報告」したのではなく、読み手に「体験」させようと試みて

読者は冒頭から十五ページにわたつて、米海軍のテストパイロットたちが、週一人のわりで墜落事故死する現場を体験させられる。「焼けて識別不能」と婉曲に報告される死体は、一面黒焦げとなり、火眼れができ、顔も髪も耳も焼け焦げ、膝と肘の関節

誇り高い資質の持ち主たちはソ連のスパイトニク1号の成功など相手にしなかった。ラジオを積んだ小さなカプセルがなんだ。大気圏外を飛行し、基地に戻ってくるロケット機X15は製作され、そのテスト訓練さえ行われていたからだ。

だが、政治家たちは、スパイトニクに大陸間弾道ミサイルの姿を見た。X15に続くXシリーズ機が、パイロットの操縦で地球を回る軌道を飛行するには、まだ三、四年はかかる見通しだった。

宇宙計画は変更され、巨大ミサイルの先端に人間を入れたカプセルをつけて打ち上げるマキエリー計画が立てられた。カプセル内の人間は、パイロットではない。モルモットだ。人間の前に、ソ連はイヌを乗せ、アメリカはサルを乗せて実験したことも分かる。

だが人間モルモットは宇宙飛行士と呼ばれ、アイゼンハワーは軍人テストパイロットの中から選べとNASAに指示したの



値する。中国研究に限らず、同時代の政治・経済・社会を研究対象にし、現在進行形の事象について永年健筆をふるい、後にそれら(二二〇編も)を無修正で再発表できる研究者はそう多くはないであろう。

著者の優れた点は、個人的感情を移入せずに研究対象である中国をクールに見つめる——研究者なら当然のことだが——だけでなく、また毛沢東の中国、鄧小平の中国だけを切り離すことなく、中国を歴史、文明、近代化、革命といった長期のバ

イスラムのありのままの姿

『あなたに平和を』

——中東と日本のかけ橋をつくるために

U・D・カーン・ユスフザイ 著



最近、中東に対する日本人の関心の持ち具合は明らかに変わってきている。石油危機によって日本はこの地域の重要性を知

スペクティブ(縦軸)の中に掘るとともに、深まりゆく国際的な相互依存関係、世界の潮流との関係(横軸)で常にとらえようとしていることである。この縦と横の座標軸の中に中国を置こうとする姿勢があるからこそ、的確な分析が可能となるのであろう。

上下二巻、一〇〇〇ページ近くにわたる大著ではあるが、中国ブームが落ち着きを取り戻したいま、中国を見つめ直すには格好の好著である。(Y)

(筑摩書房 上下各二四〇〇円)

らされたが、当時の関心の程度は石油の供給安定をめぐる以上のもではなかった。

しかし、その後の中東情勢のめまぐるしい変化と、石油以外の我が国と中東諸国の関係が緊密化するに従い、我々もこの地域を一つの特異な大文化圏、すなわちイスラム文化圏として意識せざるをえなくなった。イス

ラム文化圏となれば、アラブだけでなくない産油国だけでもない。その地域も中東を中心としてアフリカの北部からインド亜大陸の相当な部分に及ぶ。この大文化圏が今あらためて世界の政治・経済の表舞台に出てこようとしているのである。

だが、日本人にとってイスラムはなかなかわかりにくい。というのも、日本が明治以来欧米文化にのみ目を向け、これら第三世界をないがしろにしていた報いかもされない。が、今は、このような文化圏に住む人々の価値観、行動様式、生活感情などを理解し、積極的に彼らと対話できるようにならなければならないのである。

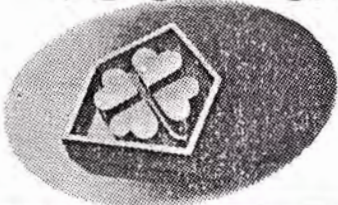
我が国にも無論学問的なイスラム研究はある。しかし、現代のイスラムの実情を知らせてくれる本は少ない。この本の著者はイラン生まれのイスラム教徒であると同時に国際的なジャーナリストである。日本にも長く住み、日本語の読み書きも達者で、日本人の心情をもよく理解する。日本人にイスラムのことを本当にわかりやすく噛んで含めるように教えることができる数少ない人の一人だろう。

前著『私のアラブ 私の日本』は、イスラム世界の真実を伝える入門書として好評をもって迎えられたようである。今回の本は、一人のモスレムとして、平和を願う人間として、現代の世界政治の荒波の中で、自立を求めて苦闘する中東諸国の実情を、実にわかりやすい日本語で伝えようとしたものである。

内容は多岐にわたっている。中東諸国が抱えている日本への期待から始まり、イラン革命前後の事情、イラン・イラク戦争(紛争)の本当の経緯、リビアのカダフィ革命評議会議長の素顔、湾岸諸国の内情、イスラエルのイラク原子炉爆撃事件の真相等々が語られ、最後はコーランについての説明と平和への祈りをもって終わる。

一読して最も強く感じたのは我々に伝えられる中東関係のニュースやコメントにいつもきわめて大きなバイアスがかかっていることである。いうまでもなく国際的通信社は英米系が押さえている。彼らの目を通したニュースや解説には、やはり彼らの主観や意識的か無意識的の意図が入っている。例えばカダフィ議長である。

たしかな礎、大きな成長。



家づくり、幸福づくりのお手伝い

協同住宅ローン株式会社

本社/東京 支店/大阪 営業所/盛岡・浦和・藤沢・福岡

ら十五年間にわたる中国問題についての折々の評論、解説をまとめて本にしたもので、著者は前書きに言う。

「本書に収録した文章は、すべて発表時のままとし、ごく単純な字句上の訂正を除いて、表現上および内容上の補正を一切おこなわず、私自身が現代中国にどのようにかかわってきたかを私自身の責任において改めて公開しようとするものである。」

過去十五年、中国の権力闘争の流れのまにまに、常に主流の言説を代弁してきた日中屋たちには、中嶋氏の真似はしたくともできない。一時期、大きな書店で中国問題という棚を作ったほどあふれていた書籍はどこに行っただけであろう。みなリンゴの袋や、すき返されてトレット・ペーパーになってしまったのであろうか。

勿論、悟空も万能ではないから、十年、二十年先を見通している訳ではない。精々で美女は妖怪であって、御馳走は汚物であるというところがわかる程度である。それでもなお、中嶋氏の過去十五年間の文章を通読してみると、現象の奥にあるものを正しくとらえ続けられてきたことは明らかである。中国の理解を深めるためにも、氏のように長期間、覚めた目で現象を追い続けている人が必要なのである。

いわゆる四人組時代に弾圧された周揚という文士がいる。彼は日本の作家たちとも交流があった。それが文革中、投獄されていた。

彼の友人である日本の作家たちは、当然のことながら、彼の身を案じていた。それだけに、四人組が失脚して、周揚が再び日本の友人たちの前に、微笑しながら現われた時、日本の高名な作家たちは、「自由」になった旧友の身の上をよろこび、四人組時代を悪と感じたのである。その感情は嘘ではあるまい。ある女流作家は、周揚のことを「やさしいおじいさん」といった感じで書いていた。

ところが、周揚は単なる「やさしいおじいさん」ではなかった。中国共産党が北京で政府を作り、大陸の実質的な支配者となった時、共産党は毛沢東主席の首唱の下に、「百花齊放、百家争鳴」の運動をおこした。自由な立場からの共産党批判を許したのである。しかしやがて反右派闘争がおこり、党を批判した民主諸党派の言論は弾圧され、筆者たちは粛正される。その中心になったのが周揚であった。周揚は異端裁判の審問官になったのである。その結果、スターリン賞を受けた、というところから、右派とは言い難い丁玲は、筆を奪われて文芸家協会の掃除婦になった。

しかし、周揚は最初から、審問官であった訳ではない。一九三〇年代、まだ中国共産党が政権から遠い存在であったころ、彼は党の立場を代表して、魯迅の代弁者としての胡風との間に論争を行なった。つまり、彼は権力につながる前は、一個の言論人であった。そして権力機構に組み入れられるに及んで、審

問官となり、権力を失うと囚人となった。嵐が過ぎて、文人としても行政官としても引退する年になった彼は、あるいは好々爺になっているかもしれないが、三蔵はその笑顔にだまされてはいけぬのである。だまされないためには、中嶋氏のような孫悟空たちによって、これからも冷静に中国大陸におこっていることを見守ってもらわなくてはならない。その点からも、「北京烈烈」はこれからも書きつがれ、何年かおきに、第二部、第三部と出版されねばならぬものであろう。

三

曾野綾子は中国に行き、彼の地の「作家たち」と実りのない話しあいをした後に、ホテルの窓から暗い街並を見下し、その中にすぐれた才能を持ちながら、書く場をあたえられないでいる本当の作家がいるに違いないと思ひ、彼らのために涙を流したと言う。

丁玲女史の例を考えると、私はあまり中国に行きたくない。たとえば日本に再び全体主義の政府ができて、周揚のような人物が現われ、私は執筆禁止になり、文芸家協会の運転手になるとしよう。アメリカやフランスから自由の臭いをブンブンさせた文学者がきて、私が彼らに乗せて東京の案内をする。外国の文学者と一緒に日本版周揚が車に乗っていて、にこやかに談笑し、日本の自然と、日本

の大衆はすばらしい、といった讃辞に鷹揚にうなずいている、といった状況を想像すると、私はこの上なく、つらくなってくるのである。だから私は中国に行きたいとは思いますが、彼の国の作家、文学者たちと会いたいとは思わない。彼らのやり方をいいの悪いのとあげつらうことは内政干渉であろう。ただ言いうることは、革命後三十二年間に中国大陸では見るべき作品はうまれなかった。革命前の三十二年の実りの豊かさに較べるとその落差は明らかである。

たまに翻訳される共産中国の作品に較べれば、香港あたりで出版される武俠小説の大長篇の方が私には親しみやすい。たとえば宋末・元初のころ、すぐれた智謀の故に蒙古軍に連れ去られた父をたずねて、青年剣士がゴビ砂漠から中央アジアをさすらう冒険小説など、大陸に残した肉親を思う華僑の心情が投影されているように見え、なかなか面白かった。もし、これらの作品を下らないというなら、それは故柴田錬三郎や五味康祐氏らの仕事をも否定することになろう。

とにかく、私は教養の一部を中国文化に負うている。従って私は死ぬまでこの大きな国の文物に目を注ぎ続けるであろう。しかし私は所詮お人好しの三歳でしかないから、しばしば八戒の言辞にまどわされる。そこで進退きわまった時に私を救出してくれる孫悟空が是非とも必要なのである。「北京烈烈」に限

らず、これからも私は、中嶋嶺雄の署名のある記事は見のがさないように読んでゆきたいと思っている。

(筑摩書房・上下各二四〇〇円)

生物学思想の諸起源を探る

C. U. M. スミス著『生命観の歴史』

筑波常治

(評論家)

『生命観の歴史』という邦訳題名は、なかなか魅力的である。生命とは何か? という問いかけは、人間の最大の関心事のひとつにちがひなく、生物学のもっとも大きな研究目標である。生物学にかぎらず科学全般にとっても同様で、さらにひろく文化史一般とも密接にかかわりあう課題である。にもかかわらずこれまで、この問題にとくに焦点をしばって書かれた生物学史の存在しなかったことは、むしろ不思議といわなければなるまい。それだけにこの新刊によせられる期待は大きい。だが本書の原題はじつは「THE PROBLEM OF LIFE」であって、邦訳題名は直訳ではない。当然ながら訳名から推測される内容と、

じっさいのそれとはかならずしも完全には合致しない。生命観だけの歴史ではなく、むしろ生物学中心の科学思想史といったほうが、より忠実に内容をあらわしているかもしれない。ともかく著者は序説のなかで「本書が生物学の研究者に役だつことをねがっているが、同時に生物学者でない人たちにも興味をもたれてほしいと思う」とのべ、さらに「私は生物学の研究だけでなく、一般の読者たちによっても手にとられるような書物を書くつもりでいる」ともいっている。たしかにこの本は生物学者でない人々にも興味をもたれる内容である。ただしそうなるためにはその人がかなり高度の教養水準にあることが条件といえる。つまり内容の程度が相当に高く、右から左へ簡単に読みとばせるものではない。そして読みとおすにはある程度以上の時間をかけてじっくり腰をすえねばならない。わたし自身すでにこれを読みはじめたあとに書評を依頼されたのだが、ついに締めきりまでに読みきることができなかった。上巻はいちおう読了したけれども、下巻ははじめのほうだけ読みおえた段階で、書評をじっさいに書かなければならないことになった。もちろん下巻のそのあとの部分もまったく手つかずというわけではなく、およそどのようなことが書かれているかという程度には目をおした。ともあれこの一文はそういう状況下で書いた感想にすぎないことを、あらかじめまずおこ

人間の二面性ということ

会田雄次 (京都大学名誉教授)

人間というものは、途方もなく真面目であるとともに、際限なくふしだらである。極端に献身的でひどく利己主義、純真ですれっからし、おそろしく賢明であるとともに、いつも愚劣でもある。

多少なりとも社会観察眼と自己反省心を持つ人なら、みんな人間の持つこのような哀しい二面性をはっきり認めるはずだ。歴史家もその点同じであり、私が馴れ親しんで来たヨーロッパの歴史家たちもみんなどこかで、そのような嘆声を洩らしていた。

ただ、歴史家が宗教者や哲学者などとはちがうのは、だから人間は宗教にすがるべし、とか、善におもむくべく修行、努力すべきだとか考えないということであろう。いや、すぐれた歴史家の資格というのは、人間の持つこのような矛盾した二面性を、どうしようもない人間の宿命と感じとり、この二面性の交錯の中に歴史が展開していくことを洞察し見極める能力だといってよい。

私がブルクハルトをひそかに敬愛する理由は、しかし、この洞察を更に進めたということにもある。

ふつうの歴史家なら、この二面性を人には賢愚の差があるとか、賢い人でも、時にはとんでもない愚かな行為をすとか、せいぜい状況によって人は変るものだというふうに把えるだけであろう。

しかし、ブルクハルトは、どんな優れた人間でも、実にいかなる瞬間においてもこの賢愚、献身と利己主義、理想と打算、愛憎という二面性から脱却し得るものではないということを知り、それを私たちに痛切なまでに啓示してくれるのだ。

戦後の私たちは、浅薄すぎるアメリカの人間観の影響を受けすぎたせいもある。

この人間の二面性を見つめる能力を失い、他人や社会を攻撃することで自分を正義人そのものに化したと単純に信じこんだり、きれいな事をいうだけで自分が浄化したように思う傾向をはびこらせ過ぎたようである。何とかこの「浅薄ヒューマニズム」というヒロポン中毒から抜け出られないものであろうか。

文化会議

昭和五十六年十一月号
通巻第一四九号

人間の二面性ということ

会田 雄次 1

儀礼の意味と儀礼論の現在

吉田 敦彦 2

国際的相互依存

矢野 暢 21

日本文化会議年次集会・報告

佐瀬 昌盛 38

■えつらんしつ

中嶋嶺雄著『北京烈烈』

三浦 朱門 33

C・U・M・スミス著『生命観の歴史』

筑波 常治 35

■研究ノート

『話し言葉』の変遷

北島 昭夫 40

■あのみちこのまち

今は昔、植物社会学のメッカ

宮脇 昭 44

■風 鐸

手作りの結婚披露宴

市原 豊太 46

或る教師のこと

西部 邁 47

朝がゆ礼讃

勝田吉太郎 48

東南アジアの技能形成方式

小池 和男 49

談話室

編集後記

50

43

えほ^{★★}

群馬県日中友好協会事務局員

みやざわ くにえ さん
宮沢邦枝 さん
(28歳)

事務局をひき受けて三年
目。中国の人は人なごうく
て好き。お習字が得意。地
方は全てが協会の仕事なの
でやりがいがあります。



地方の仕事はやりがい

観点上の矛盾

この情報による情報分析には
当たっていることも少なくない
が、限界もある。

たとえば、一九七六年五月の
文章で、天安門事件の基本的性
格を、いみじくも「反文化大革
命」と書いている。また、七三
年十月の文章では「林彪異変と
いう深刻な代価のうちにニクソ
ンを北京に迎えた」と書き、林
彪事件とニクソン訪中間題の関
連を示唆しており、七二年八月
の文章では、鄧小平の再復活を
予測している。

けれども、半封建社会から、
一挙に社会主義社会とびこみ
根深い封建遺制をひきずった十
億の民をもつ巨大な国の革命
を「当世者の苦悩への共感」
なしにとらえてくるのが不可能な
ことは、八一年六月の党六中総
の「歴史共議」の、毛沢東と毛
沢東思想の位置づけ、本書の
筆者の観点との矛盾として指摘
しておく必要がある。

る六六年四月に、自己の作品
の無効を宣言する自己批判をお
こなった。巴金は、八〇年春来
日したとき、朝日講堂で講演
し、「文革」の初め、私は
『文革』がわからず、『四人
組』に反感をした。その後次第
にこれらの正体がわかってき

れ、まずお互いにそれを理
解しようとすることが必要な
のではないか。だからこれは中

た。この私自身の最初の懸かき
と誤りの社会的、歴史的根源を
長編で追及していきたい」との
べて大きな感銘をあたらえた。

「文革」の初期、中国の多く
の文化人が「文革」の本質がわ
からず苦しんだ。

「もしも、観察者に、当事者
の苦悩への共感がないなら、革
命の実態をとらえることはでき
まい」という竹内好の態度は、日
本の多くの文化人に共通する心

情であり、それ故に中国の文化
人と共に誤り、共に苦しんだ。

ところが、この本の著者は、
これを、情勢分析を誤る「心情
主義」としてきびしく排し、最
初から「文化大革命」にたいし
て冷たく、否定的立場を貫ぬい
た。そして、「文革」を、中国

共産党中央部における党内闘
争、すなわち「毛沢東路線」は
「実権派」の闘争と見、セシモ
ニーにおける指導者の序列の変

受賞者 中嶋 嶺雄氏

作品 『北京烈烈』(筑摩書房)

反時代的考察の勝利

永井陽之助(東京工業大学教授)

「或る人の政治思想を知るには、その人の女性観をきくに限る」と指摘したのはマルクスである。戦後日本の知識人にとって現代中国は、「なんと底深く浩洋たる海原」(本書「あとがき」中嶋氏自身の語)として、己の姿をうつす格好の鏡の役割を果たしてきたようである。

戦後、その専門、非専門をとわず、おびたしい数の人びとが中国を語りつづけてきた。そしてその大半は、中国を語ったつもりで、実は自己自身を語ったに過ぎなかった。それは文化大革命の激動期において頂点に達した観がある。中嶋嶺雄氏の『北京烈烈—激動する中国』(筑摩書房)は、1966年の彭真失脚事件のなかに、毛体制の動揺を示す「一種の肅清」をかぎつけて以来、劉少奇の失脚、林彪のナゾの死、周恩来の死去、不死鳥のような鄧小平の登場、そして華国鋒政権の成立のなかに、「毛沢東批判と、中国の本格的な現代化=工業化への開始」を予見した論文にいたる、約15年におよぶ激動期を対象としている。

中嶋氏は、この文化大革命を一貫して「毛沢東政治の極限形態としての党内闘争の大衆運動化」とみる基本的な視座をとりつづけた。そして、現代中国理解のカギを、中国をめぐる大国ゲームの巨視分析のなかにではなく、中国内政の微視分析におき、中国内政の動態とのリンケージにおいて中ソ対立をはじめ大国間のパワー・ゲームを理解しようとする姿勢をくずさなかった。その方法論的姿勢は、わが国ジャーナリズムや論壇の“時流”に抗して、609編におよぶ膨大な巻末の著述目録に示される、たゆみない氏の実証的調査と研究の努力にうらづけられていた。

今日、何よりも悲しく思うことは、中嶋氏のように、過去の評論を「発表時のまま」の形で公表できる論考がどれだけあるかということよりも、あれほど「虎の威を借りて」居丈高に「文革の世界史的意義」や「人間変革の実験」を説きつづけてきた、わが国論壇の寵児たちから、「私に過ちはない。もしあるとすれば、ただ一つ、それは権力闘争において、あなた方に破れたことだ」と、啖呵を切った一人の江青夫人をも生まなかつたということである。その意味で、中嶋氏の業績の真価は、やがて中国の政治状況が変化し、あらたな権力によって文革の再評価が始まることであっても、いささかもその価値を減じることのない実証性と先見性に裏づけられた「反時代的考察の勝利」だという点にある。



中 嶋 嶺 雄 (なかじま みねお)

受賞者略歴

1936年生まれ。東京外国語大学中国語学科卒業。東京外国語大学助教授を経て、現在、同大学外国語学部教授。この間、オーストラリア国立大学現代中国センター客員教授、パリ政治学院客員教授などを歴任。

著書『中ソ対立と現代』（中央公論社）、『新冷戦の時代』（TBSブリタニカ）など。